

# Alice Walker 研究——Meridian と自由

前 川 裕 治

A Study of Alice Walker: Meridian and her Freedom

Yuji MAEKAWA

## Abstract

This is a study of Alice Walker's second novel *Meridian*. In her first novel, *The Third Life of Grange Copeland*, she writes three stereotypes of black women, Josie, Margaret, and Mem, whom she assigns three different roles. Common points of these three black women are that they are sacrifices of men and that they play roles which are forced to do by men without their knowledge. There is another woman, Ruth, who seems to have a possibility of the development of herself, but she does not intend to develop the possibility of herself but chooses to stay with her grandfather, Grange.

In *Meridian*, Meridian Hill undertakes the possibility of Ruth. She is once a sacrifice of men, but she tries to get away from that by way of denying every possible negative element which may be related to her self-negation. However, the way of negation leads her to negate herself again. She notices that it is necessary for her to have an affirmative sense instead of a negative sense. Because what she has to do is to re-define the value of her historical roles, which is Meridian's final goal to set herself free.

## I は じ め に

Alice Walker は1970年に *The Third Life of Grange Copeland* を処女作として出版した。作品のタイトルは Grange Copeland を中心にしたものだが、内容的には、Grange を中心に、彼に係わる女達の人生を扱ったものである<sup>1</sup>。この中に登場する女性は、まず Grange の第一の妻の Margaret, Grange の息子の Brownfield の妻の Mem, Brownfield と Mem の娘の Ruth, それに Grange の第二の妻で一時的に Brownfield の娼婦をしていた Josie である<sup>2</sup>。この4人の女性には各人それぞれニュアンスが異なるキャラクターを与えられているが、共通した考え方の元に描かれている。それは一つには社会の中で女性は要求され一つの女のパターンを演じる事を強いられるという見方である。「それぞれニュアンスの異なったキャラクター」

と言ったのはこういう見方に対して、少しずつ異なった反応をするという意味である。このパターン、即ち、ステレオタイプの詳説は前川（1987）に譲るとして、ここでは、結局は四人の女性はこのステレオタイプから脱する事が出来なかったという事を中心に見ていく。

黒人女性に要求された、なるべきステレオタイプとは簡単に言うと男性に絶対的に服従し、何事があっても耐え抜く忍耐力をもっている女性の事である。程度の差こそあれ、基本的には Margaret も Mem も Josie もこのステレオタイプを演じている。時代的に最も現在に近い Ruth も結局はステレオタイプを演じていたと考えられる。

この四人の中で最も服従的な、最も典型的なステレオタイプの実践者には Josie を設定している。彼女が娼婦であった事も、男性の性の道具としての女の役割を強調する為のものであるし、Grange と Brownfield の親子の異常な性の相手にされていく事も同じ意味を示していると言って良い。それでも彼女は反抗的になる事はなく、悲しみに涙する事はあっても最後まで男に依存的であろうとし続ける。

Josie よりはやや男に反抗的な態度をとるのは Margaret である。彼女の夫は Grange であったが、Grange の女遊びに腹を立てた彼女は、いわゆる Grange への面当てとして Shipley という白人の地主と浮気をするが、彼との間に子供が出来ると彼女は自殺してしまう。この時彼女の中に有った気持ちは、女にあるまじき事をしたという罪悪感であった。この罪悪感が彼女に自らの死を選択させていくのであった。この罪悪感の出所が、ステレオタイプという社会の持つ先入観念である。浮気をしているので従来の「女」というステレオタイプを社会の期待通りに演じていないのではないかと思わせるが、実は彼女の中には動かし難い価値観として「女」というステレオタイプが深く根を張っていた。

Mem という女性は Margaret 以上にステレオタイプを脱する事が出来そうな可能性をもっているし、読者もそうな事を期待しそうになる。それは何よりも彼女は知的であり、冷静であり、物事を客観的に見れる女性のように描かれているからである。それに加え、彼女は Josie や Margaret に見られなかった、大胆な男性への抵抗行動に出る事も、彼女が一つの枠から出るかもしれないと考えたくなる場所である。しかし、彼女の運命も Josie や Margaret と同じように、男の犠牲者として Brownfield に殺害されるという象徴的な結末を迎えるのである。

以上の三人に共通して言える事は、彼女達が外からの圧力によって破滅したという事である。また同時に内の圧力を受け入れる面が彼女達を自滅させたという事である。彼女達は Josie～Margaret～Mem の順で外からの圧力を認識する事、即ち、女というステレオタイプを強いられる力を認識する程度が向上して行っている。その為、外に対する対抗的態度も Josie より Margaret, Margaret より Mem の方が厳しいものとなっていく。しかし、自分達

の中に知らず知らずの内に女というステレオタイプを受容する面が育っているのだという事に眼を向ける事は、三人に共通して出来なかった事だった。その為、三人共自滅的であったという事は特に大切な面だと言える。

今の問題を更に *The Third Life of Grange Copeland* では Ruth を使う事で Alice Walker は考えようとしている。Ruth という女性の設定を見るとその事が良く分かる。何よりも彼女は、従来の女性と異なっているという事がそれを物語っている。中でも最も象徴的と思える事の一つは、彼女が祖父にあたる Grange とまるで夫婦気取りになる事である。こういう関係の現実社会での是非は別として、このような関係を描く事で彼女には型破りの価値基準を持つ可能性が有る事を示そうとしていると言って良い。Josie 達三人の女性は、それまでその社会の中では正しいとされた価値基準で持ってして破壊され、正しいとされる価値基準を信じて実践した為に自滅していった事を考えると良い。従来の見方をすれば、受け入れる事が出来ない基準を持ってして、生活を営もうとする Ruth は、少なくとも、自滅の方向に通じる価値基準を捨てて生きようとしていると言えるのではないかと考える事が出来る。*The Third Life of Grange Copeland* の中では、こういった認識が必要である事が Ruth を通して確認されるが、現実の世界で旧来の価値基準を越えて生きるという意味を更に探求する所まではしていない。いわば認識の段階で終わり、次の作品の *Meridian* に実践を託す形になっている。

この論文では、今上で言った *The Third Life of Grange Copeland* での段階的プロセスを踏まえて、*Meridian* の中でいかに考え方が発展され、旧来の価値基準を越えて自分自身に眼を向ける闘いが行われているかを見ていきたい。その為に、まず、第二章ではメリディアンが外からの圧力といえる既成の価値基準に苦しめられ、自己否定と闘う面を中心に、第三章ではその外圧を否定する事によって自己否定を乗り越えようとするが、新たな自己否定に縛られる苦しみを、第四章では今の自己否定を越えていく為の闘いとメリディアンの自分自身の本質に迫りながら自分自身を認めて行こうとする様子を見ていこうと思っている。

## II 既成の価値基準の中にあるメリディアン

私達は日常生活を営む中で物事に対して一定の判断基準を持っていて、潜在的にその基準で判断を下したり、その基準に従って行動をとっていると言える。例えば、学校の教師は何となく教師らしい事が外見から分かる事を思い出してみるのもいいし、暴力団員のお兄さんがいかにもヤクザらしい事を思い浮かべてみるのもいいと思う。教師らしさという言葉があるように「らしさ」という言葉そのものが、「教師」という一つの枠が有って、それに人が合わせていこうとしているところがある事を物語っている。こういった枠は日常性を帯びている為に、な

かなか顧みにくいものであり、そのために当然の事として私達の生活の潜在的主流をなしていくものである。

ところが、こういう枠が人間の尊厳を損なう事のない場合は問題ないが、往々にしてその枠は人間の尊厳を損なう事がよくあるものである。それにこういう基準が人間の尊厳を損なっている場合、損なっているという事が認識されるまでにはなかなか時間がかかるという事である。基準とは、当然の事として、正しい事として社会の多くの人が信じて実践している事だからである。それだからこそこの問題は非常に厄介な問題であると言える。例えば黒人の差別の問題を考えてみるといい。歴史的に黒人の差別は当然の事として考えられていた。これが一つの枠であった。この枠が間違っているという認識に改められるにはいかに困難かが何よりもよく物語っている。それにこういう枠を設ける事で人間をいかに否定し、無意味な存在にしているかが「黒人」という枠を見るとよく分かる。「黒人」という枠は一つの枠としての例であるが、枠を設ける事で人間の尊厳を損なうという事を考える際最も象徴的な例の一つとして考える事が出来る。今から、この「黒人」という枠からスタートして他の枠がいかに人間を駄目な存在として扱う事になるかを *Meridian* という Alice Walker の作品を通して見ていく事にする。

まず「黒人」という枠が黒人を否定してきた事について見てみる。黒人が歴史的に奴隷として扱われ、人間という価値を与えられるには相当の時間がかかり、もしかしたら今もその歴史を引きずっていると断言しても良いかも知れないという事は殆どの人が知っている事とっていい。黒人たちの歴史的苦しみとは、だが、人間として認められず、牛や馬と同じ扱いを受けてきたという事である。人間ではないのだから、奴隷時代は朝暗いうちから仕事に駆り出され、夜手元が見えなくなるまで働かされ、家畜と同じような小屋で寝起きを強いられた。解放後も、ジム・クロウによって彼らは隔離されたのである。こういう「黒人」という枠には下位構造があって、更に分類が可能である。その一つが *Uncle Tom* で知られる従順な黒人で、もう一つは Wright の *Bigger* に似た狂暴なタイプの黒人であった。共に黒人を考える時の基本的な枠であった。白人達は黒人に対して *Uncle Tom* のように従順な黒人になる事を期待し、要求し、同時に狂暴な黒人であってもそれももう一つの黒人のタイプとして考えていた。こういう枠を設定する事で黒人の自由な存在の仕方を制限していたといえる。即ち、こういう枠を設ける事の基本的狙いは黒人を奴隷と同じ状況に留め置く事であり、この事は黒人の人間としての可能性を認めないという事なのであった。

今まで見てきた「黒人」に対する枠を考える時には、黒人に対する方向性があった。即ち黒人に対する外からの枠の設定である。問題として厄介な事は、この枠の圧力が本人の中にある時である。現実問題として自分に対する枠があって、その中で生活している時、その枠に沿う形で生活をして行かざるを得ないものである。黒人の場合でも従順であるとか狂暴であるとい

う、白人によって設定された枠の中で生活していく時、その枠に沿って生活をして行かざるを得ないところがあるという事は納得出来る事である。ところが、そういう枠に沿わざるを得ないとしても、枠に沿って生きるという事は、決して良い結果を生まない。それは枠自体が黒人の人間としての可能性を否定するものだからである。もう少し突っ込んだ言い方をすると、枠を受け入れて生きるという事は、自分が枠の存在にしかねないという事を認める事であり、自分から自分を否定する事を意味している。また、仮に枠に入らないで生きようとしたとしても、結果は同じ事で、自分が社会的に通用していると思える枠に入らない事に対して自分を駄目な存在と思う事になる。要するに「黒人」という枠が引き起こす事は、その型を黒人に演じる事を強要し、それを演じる黒人にしても、演じない黒人にしても、結果的には、自己否定に陥ってしまうという事である。

今まで見て来た事は「黒人」という事であったが、この時、「黒人」という意味の裏には黒人男という含みがあった。歴史的には「黒人」と言う時には黒人の男を含意していた事は事実で、黒人女の事は二次的に考えられる事が多かったと言っても過言ではあるまい。しかし、黒人女の場合も黒人男と同じように枠を設けられ、その枠の範囲内に止どまる事を要求され、強要されていた事は忘れてはならない。今からこの「黒人女」という枠について考えていく事にする。

黒人男に対して狂暴なタイプと従順なタイプの枠が設定してあったように黒人女に対しても枠があった。その第一が「娼婦」である。歴史的に黒人女は男の性的な捌け口として利用されて来たと言ってい。男と言う時、これは必ずしも白人男だけを意味するのではなく、黒人男も意味する。第二のタイプは mammy である。このタイプは更に二分され、Aunt Jemima と Sapphire に分けて考えられている<sup>3</sup>。Aunt Jemima は黒人男の Uncle Tom に対応するタイプで、従順で何にでも黙々と取り組む害のない黒人女のタイプで、Sapphire は、強い黒人女を意味した。黒人社会では、特に男が白人の支配によって否定される傾向が強かった為に、男に代わって女が家庭を取りしきったりする事が多かった。そういう強い女を総称して Sapphire などという枠を設定したのである<sup>4</sup>。

Meridian の中には今のような黒人女のタイプの実践を迫る様子が描かれている。メリディアンが12歳の頃 Dexter という葬儀屋の男が彼女に迫ってきて、性的捌け口としてメリディアンを利用している事や、Dexter のいない時その店の助手がメリディアンに同じ事を求める事も、女が娼婦としての姿を求められていた事を物語っている。メリディアンは性的知識がない時も今のように男に利用されていたが、女として成熟した年齢になった後も同じように娼婦的役を要求されている。その第一の例は彼女が高校生の時の Eddie というハンサム・ボーイとの関係である。二人の関係は結婚という一つの一見娼婦像を否定するかに見える結果に達する。

しかし、結局メリディアン役は子供を生む事を強いられた黒人奴隷女的役、即ち、単なる性の相手として考えられる。子供はその後偶然生じた結果であるという、娼婦的な役に過ぎなかった事が、Eddie との生活の中や彼がメリディアンを相手にしなくなっていき、他の女と付き合い始めていく中で明らかにされていく。Truman Held という公民権運動家もメリディアンに娼婦的役を要求している男である。彼がメリディアンに “Have my beautiful black babies.” (113) という時、彼の頭の中には、メリディアンを単なる性的な相手としてしか見ていなくて、メリディアン個人の良さは何も見ていない事が分かる。またメリディアンが大学生の頃、アルバイトをしていた Raymonds 教授もメリディアンに同じように娼婦的姿を要求して老体に鞭打って彼女に迫って来る。

メリディアンには Aunt Jemima の役も、良き妻になる事を Eddie や彼の家族の人々から要求される事によって求められていた事が分かる。15才の少女に掃除、洗濯、料理といった、完璧な妻の仕事を始め、それが出来ない事で彼女は駄目な妻と見なされ、物足りない妻として Eddie は遠ざかって行き、彼女自身も Aunt Jemima になれない自分が駄目な妻と思えて来る。Sapphire の役もメリディアンは実践している。Eddie と別れた後も彼女は Eddie の浮気を攻撃する事も無く、自分自身で強く生きなければならないと考えているとこなどそれを表している。

こういった黒人女のタイプには元々白人が黒人女に対して設定したものだが、黒人男も同じように黒人女たちにこの枠を設定して、その役を演じる事を要求していた事が分かる。特に黒人男の場合は、トルーマンがメリディアンに対して行っている、男らしさ<sup>5</sup>を自覚する事を目的として黒人女を抑圧し否定する事は大切な事である。何故ならば、男らしさを感じられない事の根源は racism であるが故に、racism が sexism を引き起こしているという事になるからである。しかし、この事はあまり意識されないところで行われて来たという事、当然の事として行われて来たという事を見逃してはならない。要するに社会の多くの人が当たり前の事として受け止めていた事であるという事だ。その為、パターンを要求する側も要求される側も、自然にそれを行っていた訳である。中でも要求される側は、自分を否定する事に通じる枠を、自らの中に受け入れていたのであるから、事は重大である。メリディアンは自分の黒さ故にトルーマンの子供を身ごもりながらも、彼にそれを伝える事なく、一人で墮胎の為に病院に向かおうとする。そのときの彼女の中には自己否定がある。黒人女である事を否定する——彼女は黒人女なので黒人女を否定する事は自分を否定する事に結局なる——事になっているのである。同じく自己否定のパターンは Saxon College のモットーにも見られる。淑女たるべしと学校が学生に求める時の念頭には黒人女を否定し、白人女を肯定する所ある事が分かるし、それに、従おうとする多くの黒人女子学生達の中には知らず知らずのうちに自己否定が潜在しているの

である。

今まで見て来たように、黒人女の場合は、黒人男の場合と同じように、外側から、黒人女を規定する枠があり、それを押し付けられて行く。そのうちにそれを黒人女の側も、当然の事として受け入れて実践しているところが見られた。ところが、その枠そのものが黒人女を否定する枠であり、それを受け入れる事は自らを否定する事なのであった。もう一つ言える事は、仮に、その「黒人の女」という枠を受け入れず、実践しなかったとしても、結果は「黒人男」と同じ事、即ち、自己否定に通じるのであった。最後に出した Saxon College の例を考えれば明らかだが、枠に入れない人間は駄目な存在として考えられるのである。周りから Saxon の学生らしくないので駄目学生と繰返し言われる中で「らしく」なれない自分は駄目なのかというプロセスになるのである。どちらにしても枠の生み出すものは自己否定である事が分かる。

黒人という語を付けなくて、女とか母という事に対して一定の枠が存在していて、それも今まで見て来た黒人男とか黒人女という枠と同じ結果を生んでいる事が *Meridian* 中では示されようとしている。Alice Walker は人種的要素を取り除いたところで、社会は女や母を低く見る傾向があると考えている。いわゆる sexism が社会の中にあると考えている訳だが、その事は *Meridian* の中でも最も大切な題材の一つである。作品の最初に出て来る Mariline O'Shay という白人の女性だが、彼女の扱われ方は社会に於ける母や女に対する扱い方の基本的状況を良く物語っていて、作品の社会的色付けに成功している。彼女の死体はホルマリン漬けにされて、見世物にされている。彼女の死の原因は彼女が浮気をしたので夫が殺害したというものである。問題は殺害そのものにもある事は言うまでもないが、その後の対応である。夫による妻の殺害は当然の事として社会は容認していて、夫は罰せられる事がないし、殺した後も、一種の展示品として彼女は扱われているのである。社会の中で女がいかに低い扱いを受けているかという事が、この例から分かる。同じ事がメリディアンによって経験されている。彼女がまだ高校生だった頃、女の子は「誰々の彼女」という具合に女の子の事を考えていた。この事は女があくまでも男の付属品として扱われていた事を表しているし、女の子も自分が男の付属品的であろうとしていたという事も同時に表している。大人になっても同じ事で、メリディアンの母がその経験をしている。母は結婚する前は教師をしていて、自立的女性であった。結婚などあまり真剣に考えていなかったが、周りを見るとみんな結婚していて彼女も何か結婚する事で得るものがあると考えようになっていく。この時の母は、自分の身を男に依存して生きている女の姿が正しい生き方で、女はそういう生き方をすべきだという社会通念的なものを受け入れていった結果であると言える。

子供に対する社会の扱い方が *Meridian* の中では非道である。子供はあまり出て来ないが、中でも Wild Child という浮浪児の運命は惨めな死であるし、Camara というトルーマンとリ

ンの子供も最後は殺されている。出て来る子供は社会より暖かい愛情を受ける事はない。この事は社会そのものが母に対して軽視しているという事を表している<sup>6</sup>。子供を軽視する社会は、その子供を産む母を軽視しているという図式を想定することは困難ではない。更にこの図式を確実にする事実は、出て来る被害を被る子供はみんな女の子であるという事だ。それに子供も含めて *Meridian* に登場する女の人は一人として正当な一個の人間として扱われる事はない。

こういう事を総合的に考えると、「母」とか「女」とかという枠組みが社会の中では低く捕らえられているという事が分かる。またその低く捕らえられる女や母に対する社会基準を多くの女の人達が受け入れてしまっているという事がある。彼女達の中には当然の結果として、自己否定的意識が潜在して来るのである。

今まで黒人とか、黒人女とか、女・母といった枠が社会の中に有る事を見て来たが、こういう枠の基本的目的は、枠をはめる相手を軽視する事であると言える。逆の言い方をすると、枠にはめる事によって相手の存在の可能性を制限し、身動き出来ない状態に追いやって行っている。今まで説明した例の中でも「黒人」という枠について考えれば「黒人」という枠がいかに強力に黒人の人間としての可能性を制限し否定する価値基準であったかが分かる。この枠の目指すところは相手を自分よりより低い位置に止めておく事であったという事は、実質的にはその相手が、その価値基準を受け入れていく事で自己否定の罠に絡まって行くという事で達成されて来たのである。歴史的にも現実的にも今まで示したように、黒人は「黒人」であったし、黒人女は「黒人女」であったし、女・母は「女・母」であった。そうせざるを得ないところが有った事も理解出来るが、結果的には、例えば黒人が「黒人」という枠を演じる事は、枠そのものが駄目だという事を示すためのものであるもので、自分を駄目な存在として認める事に通じていたのである。いわゆる自己否定である。「黒人」という枠を拒否して生きる事を、もう一つの生き方として考える事が出来る。しかしこの場合も、益々外からの否定の圧力が迫って来て、最初の自己否定に通じる圧力以上の自己否定の圧力を受ける結果になる事は想像出来る。枠によって設定された役を演じない事によって、自分には社会が認めている枠すら演じ得ないという一種の被疎外感にも似た感じの自己否定が生じるのである。

自己否定のプロセスをまとめ直して考えてみると、以上の様になるが、こういった問題は決して今まで見て来た例だけに限った事ではないといえる。*Meridian* の中でも必ずしも白人から黒人への人種関係のみにこの問題を重ねるのではなく黒人男から黒人女、男から女、更には黒人から白人<sup>7</sup>へという関係にもこの問題を重ねていっている事を見ても、問題は普遍的なものである事が分かる。この章の終わりとして、今まで見て来た自己否定を引き起こす枠という既成の価値基準には一体どんな普遍的問題が有るのかを見て行く事にする。



結論的に言うと枠を設ける事で総ての多様性を否定し、画一性を強要するところにポイントがある。画一性を持ってして人間を一つの枠の中に入れようとする事は、その人を認めない事を意味している。勿論、今まで論じたように枠の基本的目的は、相手を否定し、自らの優位を確認し、誇示する為である事からして、これ自体普遍性をもった問題と言えるが、これと同じ意味で枠を持ってして人間を括ってしまう事から生じる相手の存在を否定する危険性がある事を我々は忘れてはならない。何故なら、我々の周りには相手を否定し自らの優位を確認・誇示する為であると明確に認識しないうちに、相手を画一化という枠の中に入れてしまう事が意外と多いからである。

### Ⅲ 既成の価値基準打破に向けての試み

前の章で見て来た事は枠という既成の価値基準によって我々は規定されていて、その規定によって自己否定につながる可能性があるという事であった。また外側から規定される事に加えて、その価値基準の支配する社会に暮らしている為に、その価値基準を受け入れてしまうという事がよく起こった。その結果、自分の中にも自己否定が生まれて来た。自分で自分を否定するという事が起こってしまった。自分を否定する事に通じる価値基準を逆に受け入れる事を拒否したとしても、社会の多くの人々によって支えられている基準に自分が対応出来ないという事で、また同じ自己否定の方向に進んで行く結果になった。どちらにしても、自分を否定する可能性のある既成の価値基準は外側から自分を否定するだけでなく、内側からも自分を否定する力が働く事が分かった。

外側からも否定の圧力が働き、内側からも知らない内に否定の圧力が働いて来るという事に対して対処して行くには、この自己否定の根源である既成の価値基準を否定する事である。新しく物事を始めて行こうとする時、従来の事柄を打ち消して新たに出発を始める事が大切だからである。しかも自己否定を起こさないようにする為には、今の問題としては、いずれによっても自己否定を導き出す事になるものを、打破しようとする事は自然の成り行きといえるだろう。

メリディアンはどのように既成の価値基準を打破しようとしているかという事についてみていく。彼女が試みる否定の行動の対象の第一は社会の体制そのものについてである。彼女は資本主義体制を否定している。社会構造が差別の構造を作り出していて、その差別故に犠牲者を作り出していると考えているメリディアンは、その社会そのものの体制を否定するのである。具体的には、メリディアンは金持ちになる事を徹底的に拒否している。公民権運動の同胞で、Saxon College の同級生の Anne-Marion と比べると彼女の金持ち拒否の態度には堅固のもの

がある。また、一人で運動を進めて行っている頃彼女が自分の持ち物を次から次と他人にやっ  
ていき、部屋には殆ど彼女の持ち物がなくなる事も、また車に乗る事を徹底的に拒否する事も、  
資本主義体制に反対する彼女の拒否行動であり、自然の中に生きる事を実践していく事も同じ  
意味を持っている。物質的枠に自分を入れる事を拒否し、人間の中で生きていこうという意欲  
を見せて実践している。また従来の教会も彼女の否定の対象になっている。歴史的に教会の果  
たして来た役は奴隷を作る事であり、解放後も資本主義体制を支える為に黒人たちは奴隷の状  
態に止どめおかれたが、こういう事を推し進めて来たのは教会だという考えである。教会は結  
局、黒人をアンクル・トムに仕立てるという大役を担っていて、「アンクル・トム」である事  
にイライラする黒人はビガーのように狂暴になって行き、やはり黒人の既成の枠である「黒人」  
というものを支える事につながったと考えている。黒人女の役を拒否するメリディアン  
の姿もある。黒人女という枠については前章で述べたように、“mammy”や「娼婦」というレッ  
テルが貼られていて、そういう事を要求され、自分でもその役を実践するというところがあっ  
た。こういう役を一方で要求されながら他方で彼女はこれを否定していると思える行動を取っ  
ている。例えば“mammy”について言えば、前述したように、彼女は良き妻になれていないし、  
良き妻になろうという努力もしていない。Aunt Jemima のように忍耐強く子供を育てて行こ  
うとする所は彼女の中にはなく、むしろ息子の Eddie Jr. は彼女にとって煩わしい存在であっ  
た。家庭の事も彼女は殆ど駄目で、夫の Eddie の母親が見るに見兼ねて手伝う程であった。  
その後も彼女にはまったくと言って良い程家庭内に於けるいわゆる「妻」の仕事の上達はない。  
sex の相手もいわゆる「妻」の重要な役と考えられていたが、彼女は Eddie の要求に頑な  
になる事が多く Eddie は欲求不満の日々を送っている。今の例は「娼婦」的面も含んでいるが、  
もう一つ「娼婦」像を拒むメリディアン  
の姿を付け加えておくと、前出のトルーマンが「俺  
の子を生めよ」と言った時にメリディアンが彼を人前でブック・ホルダーで殴り彼の頬から血  
を出させる場面は、彼女の娼婦像拒否の象徴的行動のように思える。母・女という性の差別を  
拒否する為の行動もメリディアンはとっている。しかもこの拒否行動は、もっと象徴的である  
といっている。二つその例を示してみる。まずその一つは、彼女が先程の息子を他人にやっ  
てしまう事である。彼女は夫の Eddie と別れて公民権運動に係わっていったが、運良く大学  
(Saxon) に行ける機会を得たが、子供をどうするかという時、彼女は子供がいたのでは大学  
に行けないという事で<sup>8</sup>、ためらいなく子供を見ず知らずの人にあげて大学に行く道を選んだ。  
もう一つの例は、彼女が堕胎の手術を受ける時であった。女・母の一つの奴隷時代からの枠は  
子供を生む事であった。彼女は自ら進んで自らの体のなかで子供が育たないように手術を受け  
るのである。

こうしてみると、昔からある自分を規定しているものをメリディアンが拒否する事で、その

基準の打破を目指していた事が分かる。勿論、こういうメリディアンへの態度は Alice Walker の基本的姿勢である。その為作品そのものも、従来のオーソドックスな小説のタイプである chronological な順序を取っていない。意図的に作品を沢山のパートに分けそれを再構築するという方法を取っている。Walker に言わせるとこれはいわゆる “crazy quilt” の方法だと言う事である<sup>9</sup>。一見統一性のないように見える作品全体も crazy quilts のように一つのまとまりを持ったものを最終的には織り成すように計算されて構成してある<sup>10</sup>。

いずれにしても、こういったところから、*Meridian* という作品は自己否定を乗り越える為、古い昔から続いているものを否定する事に期待をかけたという事が分かる。

古い昔のものを打破する事によって新しい展開を求めているメリディアンの期待は、公民権運動の狙いと一致しているように思えた。彼女が初めて公民権運動に接したのは、17才の頃で、夫 Eddie との仲がうまくいかず、息子の Eddie Jr. を持て余している頃の事であった。近所の黒人の家庭に白人も出入りしていて何か変わった雰囲気を察知するが、その後メリディアンはテレビでその家が映し出され、“a voter registration drive” (66)——彼女はその時何の事が分からなかったが——が行われている事を知るのであった。この時が公民権運動に実際に彼女が接した最初であった。その翌日、その家が爆破された為、メリディアンは居ても立ってもいられなくなり、その家に行き、ボランティアとして働き始め、公民権運動に実際に加わっていく。

作品の時代的背景である1950～1960年代という時代はアメリカでは社会運動が非常に活発に行われた時代である。1950年代には、NAACP が中心になった教育上の人種差別撤廃運動が始まり、1954年に連邦最高裁で公立学校での分離教育を違憲とする判決が出されたり、キング牧師が登場してモンゴメリーでバス・ボイコット運動を行ったり (1955) SCLC (南部キリスト教指導者会議) が1957年に設立されたりしている。1960年代には、いわゆる「黒人革命」<sup>11</sup>が始まる訳である。ざっと目を通しただけでも、大きいものは次のような事柄がある。SIT IN 運動 (1960)、公民権法 (選挙権) の成立 (1960)、フリーダム・ライダーズ (1961)、メレディス事件 (1962)、20万人ワシントン大行進 (1963)、公民権法 (雇用の差別を禁止) の成立 (1964)、「長い暑い夏」と呼ばれる人種暴動の多発 (1964)<sup>12</sup>。

*Meridian* の中では SNCC (Students Nonviolent Coordinating Committee) が中心になって行った選挙登録運動が扱われている。こういう社会運動には、一応の成果はあったと言える。上記した最高裁の判決もそれを具体的に表すものである。同時に民衆の意識が高まって来た事は事実で、差別を撤廃させる為に民衆が結集して戦おうという機運が高まって来たと言える。*Meridian* の中でも民衆が目覚め、結集していく一つの例として教会の会衆の変化が描かれている。また、選挙登録運動が苦労の中でも着々と進められ、賛同者が増えて行く話と同じく民

衆の意識が高まっていっているという事を示すものである。

メリディアンはこういう中で運動に加わって行く。彼女が実際に運動に加わって行くのは1960年4月という事になっている。その後彼女の活動は活発だったようで、活発な活動家に与えられる奨学金をもらって大学に行く機会を得ている。大学生になっても彼女はデモ行進などに積極的に加わり何でも警官隊と衝突し、刑務所に入れられている。

こういったメリディアンの一連の行動と社会運動の関係は当時の社会を良く反映したもので、メリディアンと同じく多くの人々が社会運動によって何か新しい世界が開けるという期待を持っていたのである。事実社会的な人種差別を撤廃させていく事に少しずつではあるが成果は見られたと言って良い。

表面的には、成果が有った事は事実として受け止める必要が有るが、こういう中で、メリディアンは何かおかしい、どこか間違っているという感じを抱いていたようである。そういうメリディアンの公民権運動やその運動家達に対する違和感を表していると思える幾つかの事柄がある。それを次に見ていく事でメリディアンの中に芽生え始めているものを検証していきたい。

第一に Anne-Marion という同級生について見て行くが、彼女が中心になって Saxon College の校庭にあった歴史のある古い magnolia の大木を切り倒してしまう事件があった。magnolia を切り倒す事になったいきさつにはそれなりの理由があったが<sup>13</sup>、メリディアンはどうしても magnolia は切り倒して欲しくなくて、一人で皆に反対した。しかし、結局 magnolia は切り倒された。また Anne-Marion は社会体制を批判する時、白人批判を行うが実は自分も含めて黒人は白人のようになりたいと考えていると信じていて、白人のようになって、その利点を満喫したいと思っている。そういうつじつまの合わない、一貫性の無さにメリディアンは不満を抱くのである。トルーマンという生粋の運動家もアン・マリオンと同じような不誠実なところがあるといえる。彼もアンと同じように金持ちを社会の癌だと考えながらも自分が金持ちになる事はかまわないと思っているし、彼が Che Guevara<sup>14</sup>の真似をしたり、フランス語を尤もらしく使ったりする事、また時代に流されてメリディアンから白人の女のリンに乗り換えるところ<sup>15</sup>などいかにも実質のないトルーマンの姿を表していると言える。トルーマン以上に純粋な運動家らしい Tommy Odds という人物も運動へのメリディアン、ひいては Alice Walker の不信を表す為の存在である。彼は白人の人種差別主義者に腕を撃たれて片腕を失ったという状況にあったとしても、トルーマンの妻のリンを rape する行動にでる。更に当時行われていた公民権運動に対してメリディアンの幻滅を決定的にならしめるのは「革命の為に殺す」という一種の宣言を運動家達がメリディアンに迫る時である。他の人達は——特に彼女の友達のアンは躊躇する事なく——「革命の為に殺す」と言う事が出来たが、メリディアンはどうしてもそう言う事が出来なかった。この言葉には意味深いものがあり、Chris-

tian (1980:209)<sup>16</sup> の言うように、黒人の歴史的ステレオタイプである、いわゆる、“yes man” たる事を拒否する為の行動であったと言って良い。革命家達の要求の中には第二章で論じたのと同じ意識構造がある事が分かる。即ち、yes と言えないものはのけ者にしようという意識構造であるし、総ての人を「革命の為に殺す」というタイプの中に入れないと気が済まないという画一化の狙いを見て取る事が出来る。こういう中から出て来る事は第二章で見て来たように、相手の一個の人間としての可能性を否定する事以外の何ものでもないのである。その為、「革命の為に殺す」という言葉の延長線上には盲目的に相手を認めず、ただ自らの信じる事だけを盲信して、それ以外の者は排斥し、破壊して行くという方向性があるのみである<sup>17</sup>。その盲目的破壊の中には視点を変えれば破壊すべきでないものまで含まれていても、画一性を求める力はそれに振り返る事も許さない。

公民権運動への幻滅は、メリディアンの中に新たな苦闘を作り出していたと言える。即ち、彼女の考えていた、自己否定からの脱出の方法としての、昔から自分を規定しているものを否定する事と、公民権運動の展開の方法論とが考え方の上で似通っていたからである。公民権運動の方法論がどうもおかしいと思えた事は、自分の方法がおかしいと思った事とはほぼ同じ意味を持っていた。即ち、彼女は以前の自己否定とは異質の自己否定に陥って来ていると言える。

今までの自己否定は、周りからの自分に対する否定的枠の中で暮らしていく時、その枠によって自己否定が出て来た。駄目な存在だという枠を信じて、自己否定に陥り、枠に入る事を拒否してまた自己否定に陥ってきた。それから脱出する為に、その枠そのものを拒否する事を試みたが、その途中で自分の本質まで否定する事になるかもしれないという結果に陥り、自己否定に陥って行ったといえる。

こういった苦悩は Wright の Cross Damon<sup>18</sup> が味わった苦悩と同じものであると言える。クロスはある日電車事故に遭って、それを契機に自分を規定している総ての周りのものを次々に否定していく。自分の働き先から身を隠し、家族から逃亡し、恋人との縁を切り、自分の名前すら彼は捨ててしまった。そして総ての昔の彼を捨てた後で、新たな生活をスタートして行った。その新たな生活の中で彼が求めて行こうとした事は、彼を規定する総てを捨てて、自分を何の判断の制限のもない状態において、自分を見つめてみようとした事である。その時の彼には自分の中にある拒否すべきでないものまで拒否しようとしているところがあった。それはクロスを追い続けていた地方判事の Houston よって指摘される。

“But, Damon, you made one fatal mistake. You saw through all the ideologies, pretenses, frauds, but you did not see through *yourself*.” (Wright 1953:424)

メリディアンは、このヒューストンのクロスに対する指摘と同じ根のものである。古いものを否定して行く事で新しく生まれ変わろうとする時、自分自身を見抜けないでいた面があったのだ。その為、彼女の苦悩は幾つかの形を取って表面化している。Byerman (1985: 151-152) の指摘の通り、髪が抜けたり、眼が見えなくなったり、フラフラするといった、肉体的変調はメリディアンは葛藤を表している<sup>19</sup>。また、具体的には彼女は息子の Eddie Jr. を他の人に簡単に譲ってしまった事に絶えず悩まされている。それから来る葛藤の為に、彼女は自分の周りの子供に対して極めて積極的な行動に出ている。例えば、Saxon にいた頃の彼女は近所で浮浪する Wild Child に異常なまでの関心を示しているし、デモ行進の時、Anne という近くでデモを見ていた少女をデモに誘い、彼女を気使っているし、南部で水に溺れて、母親も触れるのを厭がる程に水膨れして腐敗しかけた少女の死体を抱きかかえ、市役所に黒人居住地区の改善を求めて、抗議に行っている。また子供をかみ殺したという母親に刑務所に会いに行き涙を流すメリディアンも、たった一人公民権運動に身を捧げ、子供を指導している彼女の姿等々総て、メリディアンの中に Eddie Jr. を「捨てた」事から来る苦しみを見て取る事が出来る。「捨てるべきでないもの」まで捨てたのではないかというのがメリディアンの自己否定の発生の源なのである。

「捨てるべきでないもの」とは Eddie Jr. に象徴されるように、メリディアンが黒人の女・母であるという事に尽きる。即ち、黒人であるという事は彼女が否定しようと思っても否定し得ない事実であり、女であるという事はいくら捨てようと思っても捨てる事の出来ないメリディアンの本質中の本質なのである。彼女は自己否定を脱出しようと試みる為に自分を規定しているものを拒否していかうとして、自分の本質、即ち、identity まで捨て去るところであった。だからこの章で扱ったメリディアンの新たな自己否定の苦悩は彼女の identity の確認の問題にも通じるものである事が分かる。

メリディアンの今の苦悩はメリディアンだけの問題ではない事をリンという白人女性の中にも同じ苦しみを描く事によって普遍化しようとしている。リンという女性は人種の壁を乗り越えようとしてトミー・オッツの強姦を許したり、他の黒人男に身を任せたり、トルーマンとの仲に積極的だったりする。こういった彼女の姿は、自らが白人である為に、歴史的に黒人を抑圧した事に対する罪意識から起きて来ているものである。彼女の場合には、枠を越えようとしても、自分を規定する枠を否定しようとする意気込みがない為に、メリディアンのように自分の本質を否定する事に通じる事から来る自己否定の罪意識はないように思える<sup>20</sup>。しかし、枠を越えようとする段階で、自分を規定する枠を否定する事に似た葛藤を経験している。即ち、その人その人によって本質の持つ具体性は異なっていたとしても、メリディアンの経験した葛藤は、誰も否定する事の出来ないその人の本質を、自分の中でどのように捕らえ、受け入れる

かというものであった事が分かる。

#### IV 自己否定超越に向けて：identity 探求の道

第三章では「自己否定」を乗り越えようとするが為に昔の古いものを捨てていこうとしたが、その中に「捨てるべきでないもの」まで含まれていて、危うく捨てる所だった、その為にメリディアンは新たな自己否定に陥っていた事が分かった。この自己否定の苦しみはメリディアンが自分の中の中にあるものを見つめ直して行く事によって乗り越えられる筈である。この章では自己否定という苦悩の根源を具体的にたどって行く事で、メリディアンがどのような所に到達して行くのかという事を中心に論を展開していこうと思う。

“Have You Stolen Anything?” (39-41) の短いセクションはメリディアンの精神状況を知るのに大切なセクションである。このセクションの最初に次のような説明がある。

Meridian was conscious always of a feeling of guilt, even as a child. Yet she did not know of what she might be guilty. When she tried to express her feelings to her mother, her mother would only ask: “Have you stolen anything?” (39)

メリディアンの中に何かよく分からない罪意識があった事が分かる。この罪意識は相当長く彼女を支配していて、彼女が Saxon を卒業する頃で、肉体的変調が出始めた頃まで続いている。その頃はまた同時に、彼女がトルーマンとの間に出来た子供を彼に知らせる事なく、自分一人で病院に行き堕胎した頃でもある。即ち、彼女が一つの認識に到達するまで続いていた訳である。

この罪意識は具体的には母に対して申し訳ないという気持ちがメリディアンの中にあったという事を示している。母に対して小さな子供に何が申し訳ないと思わせたかである。それは自分が母の人生を奪ったような、母が生きる事の障害に自分になっているのではないかという気持ちがメリディアンの中にあったのである。

It was for stealing her mother’s serenity, for shattering her mother’s emerging self, that Meridian felt guilty from the very first, though she was unable to understand how this could possibly be her fault. (41)

ところが実際には、従来の「母」の役は既成の価値基準なので当然の事なので、子供は母に申

し訳ないと思う必要はない訳だが、メリディアンが母の障害に自分になっているのではないかと思ったという事は、その基準に対する疑問が生じて来ていたという事を意味している。ここで分かる事は、メリディアンが基準に対して疑問を持つという意味で母に対して罪意識を感じたという事は、前章で論じたように、新たな自己否定を生んでいく事になった。この新たな自己否定の発生源は「捨てるべきでないもの」を、即ち、黒人の女・母という事を、捨てたという所にある事も分かった。こういう事からして、メリディアンの感じていた罪意識はもっと根深いところにあると言える。

ここで今度は母への罪意識と新たな自己否定を感じた「捨てるべきでないもの」を捨てた事との係わりを詳しく見ていく事にする。この関係を考えていく時父親との幼い頃からの経験は重要である。父は母と同じく教師をしていて、歴史の教師という事もあってか、歴史的な事に興味を持っていた。中でもインディアンの事には熱心であった。特にインディアンが昔所有していたという Sacred Serpent という一種の塚には強い関心を持っていた。その塚は父の祖母の Feather Mae が結婚前から遊んでいたという所であった。ある時、その塚に Feather Mae はリスを追って入って行ったが、何か異常な別世界に入ってしまったような *ecstasy* を味わったという。メリディアンも曾祖母と同じ経験をしたいと思って父とその塚に入った事が何度かあり、一度だけ同じ気持ちを経験した事があった。即ち、この経験はメリディアンが自分の中に曾祖母達の昔の血が流れている事を象徴的に体感した事を意味している。

At other times, they [Meridian and her father] rejoiced over so tangible a connection to the past. (51)

こういう彼女の中にあるものを認識した事と、彼女が行った Eddie Jr. を捨てる事によって象徴される事——新たな自己否定を生んだ捨てるべきでないものを捨てたという事——とは決定的に相反する事なのである。息子を捨てた時の彼女は強い自己否定の中にある。

If her mother had had children in slavery she would not, automatically, have been allowed to keep them, because they would not have belonged to her but to the white person who “owned” them all. Meridian knew that enslaved women had been made miserable by the sale of their children, that they had laid down their lives, gladly, for their children, that the daughters of these enslaved women had thought their greatest blessing from “Freedom” was that it meant they could keep their own children. And what had Meridian Hill done with *her* precious child? She had given him away. She



thought of her mother as being worthy of this maternal history, and of herself as belonging to an unworthy minority, for which there was no precedent and of which she was, as far as she knew, the only member. (87-88)

彼女の中には自分が自分の中に流れている祖母達の血にあるまじき事をしたという後ろめたさがあるのである。これが為に彼女の中に罪悪感が生じていたのである。

「革命の為に殺す」と断言する事にためらいを感じるのも彼女の中に流れている昔の血との係わりがあるからである。1950～1960年代に盛んだった革命運動の欠点は、何でも古いものは破壊していく事で革命を達成していこうとする盲目性、また別な言い方をすれば、画一性があったという事はすでに論じた通りである。それと同じ発想がメリディアンの中にもあった事は事実で、彼女の自己否定の原因であった。しかしそれでも彼女に「革命の為に殺す」と断言させる事を躊躇させたものは、彼女の中に「革命」という事に対して異なった捕らえ方があったからである。彼女の考える「革命」とは Saxon College の校庭にあった magnolia の大木が伝承する歴史を切り倒す事なく維持し続ける事に象徴されている<sup>21</sup>。しかもその歴史が間違った圧力により見捨てられている場合はそれを掘り起こし、維持する事は尚一層「革命」の意味を帯びてくるのである。「歴史」を振り返って見ると、支配者側の歴史・文化は書かれる事によって残された為に、尊重され、被支配者側の歴史・文化は書かれる事がなく、語られる事によって伝えられ、それが為に、軽視されたり無視されたりしてきたと言って良い。そういうものを掘り起こす事こそ「革命的」だという考え方をしているのである。

メリディアンは北部での運動を続けていく事に対しても罪意識のようなものを感じている。そして彼女は南部へ一人戻って行く事を決心している。彼女を南部に引き戻して行くものは何かというと、原点に戻る事で新しく変わっていこうとする意欲であると言える。何か新しく始めようとする時、物事が行き詰まった時、原点に立ち返って考える事がよくあるように、メリディアンも昔の彼女の中で自分を見直そうとしていると言える<sup>22</sup>。

こうして見ると、メリディアンの中には「過去」という血が脈々と流れていた事が分かる。そしてそれに反する事を彼女がした時、その血は騒ぎ、彼女の中に罪意識を引き起こしていたのである。即ち彼女にとって大切な事は、この「過去」という自分の中に連なり流ける血を受け入れる必要があるのである。受け入れない限り彼女の中に逆巻く自己否定の血は収まる事はないし、罪意識に永遠に悩まされ続ける事になるのである。

それでは次に彼女が受け入れなければならない「過去」という血について見ていく事にする。

メリディアンの中に流れているものは彼女が黒人の女であり母であるという事である。しかもこの事は、彼女が奴隷の子孫であるという事と同じ意味を持っているのである。この事は、

本来彼女を否定する要素を持っているので、受け入れる事は出来ない事であった。しかし、今彼女はそれを受け入れる事で、自分の中に流れる血の偉大さを確認出来、勇気が湧いて来るのであった。その血の対象に選ばれているのがメリディアンの祖母達であり Louvinie という Saxon Plantation での奴隷女であり、Harriet Tubman<sup>23</sup> という戦闘的黒人女性である。

At times she thought of herself as an adventure. It thrilled her to think she belonged to the people who produced Harriet Tubman, the only American woman who'd led troops in battle. (106)

こうしてメリディアンの中には自己否定を起こしていた自分の中に流れている血を受け入れる事で、母に対して持っていた罪意識から解放されていく。

またメリディアンの中では同じ意味で黒人の文化や歴史が流れているという事が認識されていく。それは、彼女がそういった文化や歴史に接するにつけ、心の安らぎを得られるという事によって示されている。Saxon にあった Sojourner という magnolia の大木は代々黒人達の恐怖を癒し、隠れ家としての役割をなし、Saxon が plantation から大学になってからは黒人の女子学生の心の慰めの役割を果たしていた事も、“there is water in the world for us”<sup>24</sup> という言葉で始まる詩の中の「水」も黒人の「共有体験の象徴」(風呂本 1986 : 160)なのである。彼らのこの水の中には苦しい受難の歴史と共に、その中で彼らを支えてきた文化が流れているのである。またメリディアンが「私の役目は、もしかすると、本当の革命家達の……後を歩いて行く事なのかも知れない。そして彼らが立ち止まって血を洗い落とし、殺した肉体の放つ匂いに喉を詰まらせて歌う事が出来ない時に、私は前に出て、彼らがもう一度聴きたいと願っている懐かしい歌を歌うのだ。それこそが、それぞれの世代の経験によって形を変えられながらも、人々を一つにつなぐ、彼ら自身の歌だからだ。そのどの部分が欠けても、人々は苦しみ、魂を失った存在になってしまう」(205-206)と言う時の「歌」は黒人自身である事が分かる。メリディアン自身が否定してはいけなかったものとは、当たり前の事と言えば当たり前だが、自分が黒人の女であるという事であった。しかし、この事を受け入れる事がいかに困難であるかという事は今まで論じた通りである。またその受け入れ方も自己否定を引き起こす受け入れ方をすれば第二章にまた逆戻りしてしまう。一見第二章での既成の価値基準の受け入れ方と似ているように思える、今の自分が黒人の女である事を受け入れる事とは、どう違うのかという事から次には見ていく事にする。

黒人の女が否定されていたのは、子供を生み育てるという女だけの持つ特質が否定されていた為だ。その女という特質を否定的に定義する基準があってそれを正しいものとして受け入れ

ていたところに問題があった訳で、この事は今度はどうあらねばならないかという事を教えてくれる。即ち、女性特有の特質そのものは、上で論じたようにいわば本質中の本質であり、消し去る事は絶対に出来ない事だから、その特質にいかにより意義ある位置付けをするかという事に懸かってくる訳である。

It was Meridian they [Truman and Lynne] needed, and it was Meridian who was, miraculously, there....It was then that her feeling for Truman returned, but it was not sexual. It was love totally free of possessiveness or contempt. It was love that purged all thought of blame from her too accurate memory. It was forgiveness. (175)

これはトルーマンとリンが息子のカマラを失って失意のどん底にあり二人の仲も危機の状態にあった時、メリディアンが二人に助けの手を差し延べる事が出来たというところである。この場面は *Meridian* の中でも重要な転期である。それは今までメリディアンは、トルーマンに対しては自分を性的に利用した男として憎悪し、リンに対しては自分の一時は愛した男を奪った「白人」女として憎悪していた訳だが、今その二人に助けの手を差し延べ、二人を救おうという気になっているからである。Cooke (1984:176) の言うようにメリディアンは二人に対して母親の役を演じようとしているという事には注目する必要がある。これは人間関係とは母が子供に対するような関係である事が望ましいという事を示そうとしているように思える。即ち、相手を自分の子供と同じように大切に、愛情を持って接する事が重要であるという考え方である。こういうふうに考える事で、母親としての役割・存在そのものが意義あるものとして捕らえる事が出来るようになる。要約すると、母と子の間に見られる係わり方は社会の人間同志の係わり方を考える場合に必要不可欠な大切な係わり方として参考にすべきものだという位置付けが行われる事によって、今まで母が子に対して果たしていた「母」という従来の否定的な役に意義を認める事が出来るようになるのである。

同じような考え方が対象を広げて行く事で展開されている。前章で例示した社会と子供との関係では、社会が本来果たすべき母親的な役を果たしていないと言おうとしている。子供は Wild Child や Camara や他の子供達のように何も知らないでただこの世に生まれてくるが、彼らは不運としか言いようがなく、暴力を受け、死という破壊的な運命の中に置かれている。社会の果たすべき役は、この意味で、子供をただ世に創造する事だけでなく、彼らを不運から守り、更に発展的人生をおくらせる事であらねばならない訳だ。ここに社会の果たすべき役と「母」の果たすべき役の共通性を見いだす事が出来る<sup>25</sup>。

更にこの母の持つ生育するという特質は、文化・伝統・歴史等を育む事といかに関連して

いるかを位置付ける事で意義あるものとして捕らえ直す事が出来る。Alice Walker は女達が歴史的に果たしてきた事は、文化や伝統を育み伝承する事だっただと考えているところがある。それにこういう事が日常的に生きる中で実践されてきたと考えている。例えばメリディアンのお祖母の Feather Mae にしても Louvinie という黒人奴隷の生活にしても、黒人の文化や伝統は、日常生活の中で伝承されてきた。即ち、日常的に生きていく事その事自体が文化などを伝え、育むという事を意味しているのである。女が子供を生み育てていくという事も、こういう広い意味の中でとらえる事が出来るのである。このように本来の母の役割がいかに意義あるものであるかを、人間生活との係わりの中で位置付けていく事で実証していく事ができるのである。

自己否定を脱して自分の本質的役割を自分なりに定義出来たメリディアンは、新たな旅立ちをする。彼女は自己否定に苦しんでいる時、肉体的変調をきたしていたが、今は身体も徐々に回復してきているし、抜けていた髪も新たに “the soft wool of her newly grown hair” (227) として生えてきている。またそれと同時に、頭に被っていた帽子を脱ぐ事によって彼女は「脱皮」を完成する<sup>26</sup>。その時の彼女の中には、彼女が自分のものとして受け入れた、彼女の歴史の血が流れている事が分かる。

The new part had grown out of the old, though, and that was reassuring. This part of her, new, sure and ready, even eager, for the world, .... (227)

メリディアンは旅立つに当たり、同じ認識を他の人にも持ってもらいたいという願いを持っている。具体的には彼女を求めてやって来たトルーマンに自分の今までの生活を引き継ぐ事で、即ち、彼女は彼に自分が被っていた帽子を渡し、自分が今まで住んでいた部屋を譲り、また自分が書いた詩をその部屋の中に残しておく事で、彼が自分と同じ経験をしていく中で自分のしたのと同じ認識を持つ事を期待しているのである。メリディアンの期待はトルーマンを初めとして多くの人が自己否定の壁を乗り越えて自己容認する事なのである。それが彼女が最後に作った詩に表現されている。

i want to put an end to guilt  
i want to put an end to shame  
whatever you have done my sister  
(my brother)  
know i wish to forgive you

love you  
it is not the crystal stone  
of our innocence  
that circles us  
not the tooth of our purity  
that bites bloody our hearts. (219)

第四章で扱った自己容認の可能性についてのプロセスは、自己否定的状況を経て自己への眼が向けられるようになって行き、自己容認へと進んでいった。このメリディアンを経験は、他の主要登場人物にも程度の差はあっても、当て嵌める事が出来る。例えばアン・マリオンは最初は革命的戦士だったが時代の流れと共に現実的になって行き、メリディアンの地道な公民権運動を批判する手紙を出したりしている。ところが、メリディアンが旅立つ頃、彼女は Sojourner の切り株から新たな芽が出始めた事を知らせる手紙をメリディアンに出している。彼女の途中の葛藤は殆ど描かれていないが、枯れ死ぬ事なく新たな芽をだした Sojourner の意味を自分との係わりの中で見ていこうとしている姿勢は、彼女の自己容認の可能性を示している。トルーマンについてもアンと同じ事が言える。メリディアンを必要としてきて、彼女を求め、彼女と共に民衆の中で運動をしていく事で、メリディアンの経てきた苦悩と認識を学びとっていこうとする中で、彼に認識の変化が表れてきている。それは何よりも上記したようにメリディアンの帽子を受け取り彼女の住んでいた小屋に一人住み始める彼の姿が良く物語っている。リンの場合は白人という事に対し罪意識があり、それが為に黒人を特別視していた。その中から生まれたトルーマンとの結婚は、その為に不幸に終わる事は初めから明白であった。しかし、トルーマンとの不仲、息子カマーラの死等、不幸の中で彼女が悟っていく事は、自分がユダヤ人であるという事を見つめる必要があるという事なのである。その事実を知った彼女は、周りの人々を人種とは関係なく人間として見られるようになっていくのである。

自分の果たしてきた役割、自分の今まで演じてきた事柄等が役に立たないものと思えるいわゆる自己否定は現実的にはよく起こり得る問題であり、決してこれはメリディアンや *Meridian* の人々に限った事ではない。自己否定から生まれる事は、自分自身を否定する事であるから、当然良い結果が生まれない事は明らかである。こういう事からも文学の世界で自己を見つめる問題が取り扱われるにはそれなりの理由がある事が分かる。いくらつらい過去の経験でも、醜いと思えるような過去でもそれは自分の経験であり、自分の過去なのである。こういう事から眼をそらす事なく、これを受け入れて歩んで行かなければならないのである<sup>27</sup>。

## V お わ り に

今まで考えて来た事を「自由」という視点から見直してみる。自由について考える時、どんな形でその自由が損なわれるのかという事を考えると分かり易い。不自由には二種類ある。その一つが肉体的不自由で、奴隷とか、ジム・クロウといった制度的に身動きを制限するものである。もう一つは精神的な不自由である。これには外から精神的に圧力が加えられる、外的不自由と、自分の中から自分に圧力が加えられる、内的不自由とがある。

*Meridian* の中でこの不自由をもう一度検証してみると、肉体的不自由については、ジム・クロウが扱われている。場面はあまり多くないが、Mariline O'Shay の死体見物に黒人の場合は制限があったり、町のプールの使用が制限されたりする事があるといったところである。精神的な不自由は、*Meridian* では中心的に扱われている事である。まず外的圧力としては既成の価値基準が示されていた。それは黒人の女の粹として mammy 像や娼婦像が設定されている事、また女の粹として社会的事項に積極的に参加しないとといった事が設定されている。内的圧力としては、二つの自己否定が考えられた。一つは既成の価値基準が自己を否定するようなものであるが、それを知らず知らずの内に受け入れて自分を否定する事になってしまうというものである。もう一つは、今の自己否定を越える為に、既成の価値基準を否定する中で、自分の過去、即ち、本質まで、否定する事から起こる自己否定である。こういった精神的な不自由は日常的な事であり、眼に見えにくい為に、分かりにくい性質を持っていたと言える。

もう一つ不自由で考えておかなければならないのは、自分の存在がはっきりしない事からくる不自由である。自己否定によって自分の本質を否定した後に生まれるものは自分が何物か分からないが故に起こる不安定さである。この不安定さに伴うものは不自由以外の何物でもない。

こういった不自由から脱出していくには、自分自身を受け入れる事が最も大切な事である。そして自分自身の果たすべき役割の意義を自ら見だし規定する事で、自分を否定する力より解放され、自由になる事が出来ると言える。

最後に *Meridian* 以降について考えてみたい。メリディアンは一つの自己容認の段階に到達し、再出発を切っていく訳だが、彼女のこれまでの闘いは彼女の個人の闘いであったと言える。そのため Cooke (1984:175) の言うように彼女は孤独であった。むしろ個人の認識の問題なので孤独である事がメリディアンには必要であったと言った方が良いかもしれない。ところがこの個人の認識が現実の中で通用するかという難しい問題がある。他の人にもメリディアンと同じような認識を期待出来るかという問題である。確かに今まで論じたように、これは人間の本質に係わる問題で、黒人に限らず総ての人間が考えなければならない事である事は確かであ

る。しかし、人種的問題だけに限らず現実世界の様々な所で色々な形を取って現れている差別の現実を考えると、決して容易な事ではないと言わざるを得ない。それに Christian (1980: 232) の使う “heritage” を認識出来てもメリディアンのように既成の価値基準を本当に打破出来る力が発揮出来るのかという不安が残るのである。それは社会認識というものは、社会の多くの人々によって受け入れられているからこそ社会認識なのであるからである。それだけに既成の価値基準のもつ力は強力である訳だ。メリディアンは社会が、彼女が一つの認識に至った経験と同じものを、経験する事で新たな社会認識を形成していく事を願っている。トルーマンに自分のして来た事を託すのはその為である。しかし彼女が否定的に捕らえている今の社会も何らかの経過を経て出来上がった社会認識を持っているという事も事実である。こういう事を考えると、彼女の願いは決して容易なものではない。

### Notes

1. Walker は Tate とのインタビューで次のようにこの作品を説明している。  
In *The Third Life of Grange Copeland*, ostensibly about a man and his son, it is the women and how they are treated that colors everything. (Walker 1983:250-251)
2. 他にも女が出てくる。Josie の子供, Ruth の姉 2 人, 北部の白人女, 選挙登録運動をすすめる女など。彼女達も同じように被抑圧側である。
3. 詳しくは前川 (1987) を参照。
4. 他にも次のような呼ばれ方がされた。“super pitch,” “castrater,” “the Rock of Gibraltar.”
5. racism の中では黒人の男はいわば「性的不能者」として扱われた事に象徴されるように、男らしさというものを損なう方向にもって行かれていた。その為、黒人の男は、何とかして自分の男らしさを確認しようと思った訳だが、その手段が黒人女だったという訳だ。肉体的に、性的に黒人女を痛め付け、押さえ付ける事で、自分が強いという感じを実感しようとしたのである。トルーマンも、アルバイト先で白人の元で働く中で男らしさを損なわれる事があり、そのいわば鬱憤ばらしをメリディアンに対して行っているところが出て来る。
6. Christian (1985:230) で子供、特に黒人の子供を苦しめる社会、暴力を振るう社会は一つのモチーフだと言っている。即ち、子供を大切にしないという事で、その子の面倒を見る母はもっと大切にされないという論法につながる。
7. トミーもトルーマンも白人女という否定的枠を持っていてそれをリンに当て嵌めている。それは性的に白人女は黒人男を求めているというものだが、それを当て嵌められたリンは自己否定の傾向を見せしていく。
8. Saxon は淑女養成校なので子持ちは行けないという事である。
9. Tate との対談で実際に Walker は次のようにいっている。  
...when I wrote *Meridian*, I realized that the chronological sequence is not one that permits me the kind of freedom I need in order to create. And I wanted to do something like a crazy quilt, or like *Cane* [by Jean Toomer]—if you want to be literary—something that works on the mind in different patterns. (Tate 1983:176)
10. Walker の考え方がこれは必ずしも彼女独自のものではなく、彼女も言っているように Toomer の *Cane* (1923) にも似ているし、Anderson の *Winesburg, Ohio* (1919) にも似ている。

11. Franklin (1974 (1978)) では第25章に「黒人革命」というタイトルを付けて、1960年代を論じている。
12. 1960年の中頃からは運動のスタイルが変わって来て暴力的になって行く。その典型が1966年のカーマikelを中心とする“Black Power”宣言である。
13. Wild Child の葬式を学校の chapel で行おうとしたが学長が認めずその腹いせに学校に反対する意味を込めて学校の持ちものの一つである magnolia を破壊する事で抵抗を示そうとした。
14. Ernesto (“Che”) Guevara (1928-1967) アルゼンチン生まれのキューバの革命家・政治指導者。Castro と共にキューバ革命を指揮し、ボリビアでゲリラ戦の指導中戦死した。(小学館・ランダムハウス英和大辞典)
15. 1950～1960年代の最初は白人・黒人共同で差別に反対する声の一つの流行だったと言って良い。色を乗り越えているという事を証明する為の一つのポーズであった。それが1960年代中頃になると、白人を排斥して blackness を強調する時代に入っていく。
16. We have lived this history. Meridian’s essential characteristic, her resistance to accepting the easy solution, her refusal to speak the word without living its meaning, reminds us of the many who succumbed to group pressure whether or not they believed what they were saying, and the many who simply would not, could not, say yes without fussing, fighting, questioning. (Christian 1980:209)
17. 風呂本 (1986:157) によると黒人霊歌も否定される事もあったという事である。
18. *The Outsider* (Wright 1953) の主人公である。
19. 精神的苦悶は肉体的に表れるものと Walker は言明している。(Tate 1983:179-180)  
 “The body and the mind really are united....Her [Meridian’s] struggle is to not die.” (Tate 1983:180)
20. 彼女の場合は、白人、ユダヤ人、母、女という枠が本質的なものである。
21. magnolia の大木は Louvinie という黒人奴隷女の舌が肥やしとなって大木に育ったという歴史を持っている事からして、黒人の文化や歴史を象徴しているといえる。Louvinie という女性は、昔主人の子供にアフリカの怖い話をしてやったが、その為子供の一人が心臓麻痺で死んでしまった。それに腹を立てた主人は、彼女の舌を切ってそれをその木の下に埋めたという事である。
22. Walker 自身も南部に一時戻っている。それが “Choosing to Stay at Home: Ten Years after the March on Washington” (Walker 1983:158-170) というエッセイになっている。
23. Harriet Tubman (1820-1913) 19世紀に活躍した黒人女性戦闘家である。彼女はメリーランドの元奴隷であったが、自由になった後、奴隷のカナダなどへの逃亡を助ける為に活動をした。Loewenberg et al., eds. (1976 (1978):219-221) に Tubman の解説がある。また、Ann Petry の作品に *Harriet Tubman, Conductor on the Underground Railroad* (1963) があり、Tubman の活発な活動期の1849～南北戦争が扱われている。
24. 作品の最後のあたりでメリディアンはトルーマンといる時この詩を作っている。  
 there is water in the world for us  
 brought by our friends  
 though the rock of mother and god  
 vanishes into sand  
 and we, cast out alone  
 to heal  
 and re-create  
 ourselves (219)
25. Christian (1985:247-248) では次のように motherhood を位置付けている。



...motherhood includes not only the bearing of children but the resistance against that which would destroy life and the nurturance of that which would support and develop life.

26. Cooke (1984:165) ではこれを hibernation のイメージとして Ellison などの例をとって説明している。民話的要素として「冬眠」のイメージが使われている事は事実だが、語感としてはむしろ「脱皮」のイメージの方が合うように思える。
27. Walker が自伝的である事もこの意味がある。自伝的傾向を示す作家の Maya Angelou の意図も同じであろうし、Wright, Baldwin, Ellison といった作家の作品が自伝的要素を持っている事も自己確認を最も大切な出発点と考えているからである。

## References

- Anderson, Sherwood. 1919 (1969) *Winesburg, Ohio*. The Viking Press.
- Angelou, Maya. 1960 *I Know Why the Caged Bird Sings*. Random House.
- Baldwin, James. 1953 (1972) *Go Tell It on the Mountain*. Dell Publishing Co., Inc.
- Byerman, Keith E. 1985 *Fingering the Jagged Grain: Tradition and Form in Recent Black Fiction*. The University of Georgia Press.
- Christian, Barbara. 1980 *Black Women Novelists: The Development of a Tradition, 1892-1976*. Greenwood Press.
- Christian, Barbara. 1985 *Black Feminist Criticism: Perspective on Black Women Writers*. Pergamon Press Inc.
- Cooke, Michael G. 1984 *Afro-American Literature in the Twentieth Century: The Achievement of Intimacy*. Yale University Press.
- Ellison, Ralph. 1952 (1970) *Invisible Man*. Penguin Books Ltd.
- Franklin, John Hope (井出義光他訳). 1974 (1978) *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*. (『アメリカ黒人の歴史：奴隷から自由へ』) Alfred A. Knopf., Inc. (研究社).
- Loewenberg, James and Bogin, Ruth eds. 1976 (1978) *Black Women in Nineteenth-Century American Life: Their Words Their Thoughts Their Feelings*. The Pennsylvania State University Press.
- Miller, Baxtor R. ed. 1981 *Black American Literature and Humanism*. The University Press of Kentucky.
- Petry, Ann. 1963 (1971) *Harriet Tubman, Conductor on the Underground Railroad*. Archway.
- Pryse, Marjorie et al. eds. 1985 *Conjuring: Black Women, Fiction, and Literary Tradition*. Indiana University Press.
- Rubin, Jr., Louis D. et al. eds. 1985 *The History of Southern Literature*. Louisiana State University Press.
- Russel, Lynda Kaye. 1982 "The Dilemma of Black Women in the Fiction of Alice Walker." MA Thesis at Stephen F. Austin State University.
- Tate, Claudia, ed. 1983 *Black Women Writers at Work*. The Continuum Publishing Company.
- Toomer, Jean. 1923 (1975) *Cane*. Liveright Publishing Corporation.
- Wade-Gayles, Gloria. 1984 *No Crystal Stair: Visions of Race and Sex in Black Women's Fiction*. The Pilgrim Press.
- Walker, Alice. 1970 *The Third Life of Grange Copeland*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Walker, Alice. 1973 *In Love and Trouble*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Walker, Alice. 1976 *Meridian*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Walker, Alice. 1981 *You Can't Keep A Good Woman Down*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.

Walker, Alice. 1982 *The Color Purple*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.

Walker, Alice. 1983 *In Search of Our Mothers' Gardens*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.

Wright, Richard. 1953 (1965) *The Outsider*. Perennial Library.

加藤恒彦. 1986 『アメリカ黒人女性作家の世界——小説にみるもう一つの現代アメリカ』, 創元社.

浜本武雄他. 1987 『英語青年4月号——特集:現代アメリカ黒人女性作家』, 研究社.

風呂本惇子. 1986 『アメリカ黒人文学とフォークロア』, 山口書店.

前川裕治. 1987 「Alice Walker の*The Third Life of Grange Copeland* について——ステレオタイプからの脱出への模索——」, 広島女学院大学論集 通巻第37集.